

マルコによる福音書 2:18-22

「花婿との祝いの宴」

2024年4月14日(主の日)

3月31日のイースター礼拝のあと、ひさしぶりに愛餐会を開くことができました。多くの方が参加をし、主のご復活の礼拝に続いて行われるのにふさわしい、喜びの食卓となりました。愛餐の食事は、食事を大切にす旧約の民、ユダヤの人々から受け継ぎ、主イエスも大切にすられ、その後の教会も受け継いできた大切な教会の交わりの一つです。豪華な食事をしたとの記述は聖書のどこにもありませんけれど、新約聖書の時代には、みな食事をもち寄ったことも伺わせるような記述もありますから、その時できるだけの食事の準備をしたのだらうと思います。わたしたちの愛餐会もそのような教会らしい会だったと思い、喜んでます。その2週間前に、礼拝で、今日の直前の箇所、主イエスが徴税人や罪人たちと食事をする場面の説教を聞いたばかりでもありました。そのことを思い出し、ふと、あの愛餐会の食事の場にもよかったはずの何人かの顔を思い起こしました。また、イースターに一人で食事をしている人、人からうとまれて誰にも招かれない人こそここにいてほしい、との思いもうまれました。

本日の聖書の箇所は、この直前の主イエスの罪人たちとの食事とあきらかに結びついていると思います。罪人たちと食事をしている姿を非難したファリサイ派の律法学者たちは、その食事にけちをつけただけでなく、断食のこをもち出したのです。洗礼者ヨハネの弟子やファリサイ派の弟子たちはだれもが認める立派な信仰者だ。あの人達が断食しているのに、どうしてあなたの弟子たちは断食しないのですか、と。もちろん純粋な疑問ではありません。非難しているのです。断食もしないようならけた弟子たちだ、指導者のあなたの教育が悪いのではないか、と。

断食はモーセに遡るユダヤの伝統といってもいい信仰の実践です。ダビデも断食をしました。神殿ができてからは、年に一度の大贖罪日という罪の赦しを大祭司が執り成す特別な日にみんな断食をするようになりました。国が滅びてバビロンに連れて行かれた後は、年に4回断食の日が定められました。主イエスも断食をなさいました。断食は、もともとは、神の御心を求めて祈るためにすることであり、また、神の御前に入るために、すなわち神の救いの実現、裁きに備えて悔い改めるために断食をしたのです。祈るためにせよ、悔い改めるためにせよ、断食は神へと向かうために行うものでした。ところが、それが形だけになってしまいます。イザヤ書第58章にこのように記されています。

何故あなたはわたしたちの断食を顧みず／苦行しても認めてくださらなかったのか。見よ、断食の日にお前たちはしたい事をし／お前たちのために労する人々を追い使う。

見よ／お前たちは断食しながら争いといさかいを起こし／神に逆らって、こぶしを振るう。お前たちが今しているような断食によっては／お前たちの声が天で聞か

れることはない。

そのようなものがわたしの選ぶ断食／苦行の日であろうか。葦のように頭を垂れ、粗布を敷き、灰をまくこと／それを、お前は断食と呼び／主に喜ばれる日と呼ぶのか。神へ心を向けるためのものだったはずの断食が、ただ、決まりにしたがってやっていたらいいものになってしまった。自分の信仰の立派さをみせびらかすものになってしまったのです。このイザヤ書では、断食をしていかにも敬虔に神様のことを考えているようであり、好き勝手なことをしている。お互いを愛さずに争いばかりしており、弱い人たちを助けようとしめない。いかにも大変だという顔をして荒布を敷いて灰をまくという形だけのことしかしていない、そう神は信仰の偽善を糾弾なさいます。主イエスもまた、みんなの前でつらそうな顔をして、いかにもわたしは断食しています、という態度を戒められました。

わたしたちキリスト者特にプロテスタント教会では断食を定めていません。断食どころか、やらなければならないこと、は一つも定めていないのです。礼拝、祈り、聖書を読むこと、奉仕、献金、人を助けること、これらは確かに断食と違って教会の業として定めていることです。しかし、それは「やらなくてはならないこと」ではないし、形だけやっていたらいいものでもありません。これらの教会のことがらは、私達の信仰において、自分の意思で行うことです。自分で礼拝し、自分から祈り、自分から施すものだからです。礼拝するのは、神を賛美し、御言葉をいただくことが喜びであり自分にはなくてはならないものだからであり、祈るのは神の御心を聞くことが生活にどうしても必要であり、神に聞いていただくことが喜びだからです。断食というものはここには残りませんでした。苦しい思いをすることに意義がある、というふうに意味がかわってしまうことを知ったからでしょう。では断食はなくしてしまって何にもなしです、と言って良いのか。断食は神へと向かうため、また余ったものを分け与えるために行うというのであれば、わたしたちはおいしいものを食べることはばかり考えるのではなく、時に質素な食事にして、作る時間と食べる時間を節約し、余った時間を祈る時間に使い、あまったお金を献金・募金してもいいかもしれない。かえって、決まった断食をした方が楽で、自主的になにかをするというのは難しいことかもしれません。たとえ断食という習慣や決まりがなくても、どうやって主に心を向けているのか、そのことが問われます。

ここで主イエスがおっしゃった婚礼、結婚式の宴会、披露宴のたとえはよくわかるたとえです。花婿といっしょに婚礼の席にすわっている。この喜びの宴の席上で、苦しい顔で「わたしは断食します」などと言えらるだろうか、というのです。興味深いのは、「断食してはならない。」とはおっしゃっていないことです。「空気を読みなさい。こんなところで断食するなんて言えないでしょう」とおっしゃっているのでもないのです。ここで主イエスがおっしゃっているのは、花婿と一緒にいるのに、婚礼の客は断食などできるはずがないじゃないか、ということです。花婿がいっしょにいる間は、断食などできない。嬉しいからです。めでたいんです。そんなときに断食などできるわけがない！たとえそれが信仰

的なものにみえたとしても、形式を守り、あるいは自分の頑なさを貫いたりするのではなく、逆に、周りの顔色をみてどうするかを決めるのでもなく、ただ、花婿である主イエスがいてくださる。この喜びに生きるのがわたしたちの信仰です。

もちろん、喜びに生きる、ということは何もしないでいいとか、自分のその日の気分でゆったりやらなかったりする、ということではありません。喜びに満たされているからこそ、主の道に従うこと、主のご命令に従うことがおこる。恵に感謝し、お応えをする生活が生まれます。信仰の戦いをしなくてはならないこともあるでしょう。そこにひよっとすると、一般には断食に見えるようなことをすることもあるかもしれない。日曜日の朝、寝坊しないで準備をして礼拝に来ることも、人からみればずいぶん熱心なことに見えるかもしれない。奉仕をしたり献金をしたり、またお祈りするにしても時間をとるわけで、食事を断ってはいないかもしれませんが、それは本来の断食の心だといっていいものです。わたしたちはおのずと喜びから生まれる断食をしているとも言えるのです。「断食」という名前ではありませんが、しかし、形式ではない主に心をまことに向けるための生活がわたしたちの断食です。主はこのことを必ず顧みてくださると信じます。

断食はそのもの自体が悪いわけではない。その心を失ったことが問題なわけですが、ここでヨハネの弟子たちも断食していたと言われていることは注目すべきことです。その指導者である洗礼者ヨハネは、主イエスのことを聖なるいと高き方であると知っていました。ヨハネと弟子たちは完全なものでないにしろ、断食をただやればいいものだとは考えていなかったはずですが。それでも、断食からは自由にはなれなかったのです。なぜか。ヨハネと弟子は救い主が来られることを知っていました。そこでは神の裁きが行われることもしっており、悔改めて立ち帰るべきこともしっていました。けれども、主のご復活を知らなかったのです。主のご復活、それを知り、その命にあずかった者だけがまことの喜びを知るからです。

ここで花婿が一緒にいるので断食などできるはずがないじゃないか、とおっしゃったあと。「しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その日には、彼らは断食することになる」とおっしゃいました。やや唐突にも思えるこの言葉は言うまでもなく、主の十字架のことをおっしゃっています。その日には、誰が強制しなくたって、弟子たちも断食することになる。ところが、「その日」というのは一日だけのことです。金曜日の昼に主イエスは十字架につけられて死なれます。そして、夕方墓に葬られます。次の日の土曜日は当然、誰もものを口にできず、断食することになったでしょう。けれども、弟子たちが食事をしなかったのはこの日だけです。次の日曜日の朝、主イエスは復活なさいました。そして、弟子たちのところに姿をあらわされ、何をなさったか。一緒に食事をしてくださったのです。弟子たちは、主イエスを裏切って逃げました。その後もユダヤ指導者たちの手にかかるのではないかと恐れて集まっていた。けれどもそこに主イエスが来てくださったのです。復活の主イエスと一緒に食事をしながら、弟子たちは喜んだに違いありません。花婿キリストは命を得ておられる、共にいてくださる。わたしたちは、このお方に赦され、愛され

ているのだ、と。そこで弟子たちは、教会は断食をやめたのです。もう必要なくなったのです。花婿主イエスはこれからもいつも一緒にいてくださるからです。

ところが、断食の習慣はキリスト教会に残りました。中世、16世紀、当時のキリスト教会も断食をしていたのです。受難週、イースターの前の日曜日を除く平日の40日の間にこの日は肉を食べない、この日は魚も肉も食べない、そういう断食をしていました。また、結婚式など晴れやかなこともおこなわなかったのです。けれども、わたしたち改革教会は、それに異論を唱えました。主イエスはもう復活なさっている。当時でいえば、主の十字架と復活は1500年前に起こったのだから、今の受難節であっても毎日が喜びの日であるはずだ、それなのに陰鬱な顔をして、日本風にいうならお通夜みたいな顔をして、まるで主イエスがまだ甦っておられないかのように過ごすのはおかしい、と言ったのです。そのとおりだと思います。主はもう復活なさっている。花婿がいっしょにいる、それなのに断食できるでしょうか。受難節はわたしたちにとって主イエスの苦しみを覚える特別な時であり続けています。しかし、それは恵の中、喜びの中において、あの主のご受難と十字架が私達の救いであり恵である、と覚えてのことです。そもそも主の十字架が恵であることは、主の復活の光の中でしかわかりようのないことなのですから。受難節であっても、一日一日が主イエスがともにいてくださる喜びの日なのです。

主イエスは、これがまったく新しいことだ、とおっしゃいます。古くなった服に、あたらしい布でツギハギをしたら、新しい方が頑丈ですから、古い本体を破ってしまうじゃないか。新しいぶどう酒とはまだ発酵が続いているぶどう酒のことです。これを古くなってしまった革袋にいれるとその発酵のせいでやぶれてしまう。主イエスの新しさを受け取るには、受け取る側も新しくなければならないのです。これはわかります。けれどもどうやって、主イエスをご自分がもたらされる全く新しいこの喜び、全く新しい喜びであるご自分を受け止めるために、あなたも新しくなりなさい、とおっしゃっています。それはしかし、救いにあずかるのにふさわしい立派な人間になれ、よく勉強して理解できるようになれ、行儀のいい人になれ、ということではありません。主イエスは、罪人たちと食事をなさったのです。そもそも、わたしたちが自力で神の救いにふさわしい者になるなど、ありえないことです。誰にもできないことです。そうではなく、ふさわしい新しい自身を主イエスに求めるのです。主イエスは十字架の死をもって私たちの罪を赦し、私たちが神の子として下さいました。その救いの恵みをまことに知り、喜び祝う礼拝と生活。そしてその主イエスは来たるべき将来に、もうわたしたちのところに再び来て下さり、今はまだその途上である救いを完成して下さることを希望として生きる。ここにこそ私たちの新しさがあります。救いにふさわしい新しい者にさせていただく、これ自体が神のみ業なのです。洗礼によって主の救いにあずかり、命の希望をいただいてわたしたちはそこで全く新しい者にされました。そして、終わりの日まで、聖霊によって主の交わりの中に、完成の希望を持って歩む、それこそが主イエスを新しいぶどう酒として受け入れることができる新しい皮袋です。